

長州の東端、知られざる幕末維新物語

岩国幕末紀行

IWAKUNI
BAKUMATSU
KIKOU

IWAKUNI
BAKUMATSU
KIKOU



■岩国市へのアクセス

- | | |
|---|---------------------------|
|  山陽自動車道
Sanyo Expressway | ⇒ 岩国I.C.
錦帯橋へは約10分 |
|  JR山陽新幹線
Sanyo Shinkansen | ⇒ 新岩国駅
錦帯橋へはバスで約15分 |
|  JR山陽本線
Sanyo Line | ⇒ JR岩国駅
錦帯橋へはバスで約20分 |
|  飛行機
Airplane | ⇒ 岩国錦帯橋空港
錦帯橋へはバスで約20分 |

■お問い合わせ・発行元

岩国市産業振興部観光振興課 Tel.0827-29-5116
〒740-8585 山口県岩国市今津町1-14-51

岩国市公式観光ホームページ [岩国市 旅の架け橋](#) [検索](#)

岩国市教育委員会岩国徴古館 Tel.0827-41-0452
〒741-0081 山口県岩国市横山2-7-19

岩国の歴史に関するホームページ [岩国徴古館](#) [検索](#)

参考文献／岩国市史・美和町史・周東町史・吉川経幹周旋記・岩国沿革志・岩国人物誌・岩国市の文化財・本郷村の明治維新・岩国英国語学所に関する研究



1 岩国藩の活躍と悲願成就

明治維新を成した長州藩の輝かしい活躍の陰で、岩国は長州藩の危機を救った。それは、家格の復活を遂げたい吉川家再興の物語でもある。

◆家格の問題

幕末から遡ることおよそ250年、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いから物語は始まる。

後の岩国藩主となる吉川家の当主・広家は、合戦の行く末を案じていた。徳川家康率いる東軍に対して、宗家である毛利家が組する西軍に勝ち目は無い。毛利家当主・輝元(広家の従兄)は西軍の総大将に担がれ、敗北すれば領土を失い、毛利家は滅びることになるだろう。そこで広家は、事前に東軍と内通すると、密約を交わす。毛利軍は兵を動かさない。その見返りに毛利家の所領安堵を約束して欲しいと。

かくして毛利軍は動かず、西軍は敗北。そして密約どおり、毛利家の所領は守られるはずだった。しかし、輝元が積極的に関西総大将として働いていた証が発見されると、事態は急変する。家康はこれを許さず、毛利家の所領を全て取り上げ、吉川

家へ周防・長門の2ヶ国を与えるという。広家は必死に、毛利家の存続を嘆願した。そしてその結果、毛利家は周防・長門に減封となり、吉川家は岩国の地を与えられた。

しかし、もし関ヶ原の戦いで毛利軍が戦っていたら、西軍に勝機があったのではないかと、毛利家には広家の一連の働きを良く思わない者もあった。

やがて幕藩体制が整うなか、岩国だけは支藩の格(城主格)ではなく岩国領とされ、長府・徳山・清見は支藩となった。広家のときには城主格だったものが、代の変遷と共に毛利宗家との間に距離が生まれ、他の支藩と同じ直系一門であるにも関わらず、扱いは単なる家臣になっていた。

かくして、城主格を取り戻すことは吉川家の悲願となり、江戸期を通じてその努力は続くが、なかなか実現しない。そしてようやく幕末に至り、その転機は訪れる。

◆ペリー来航

嘉永6年(1853)6月、日本の開国を求めるアメリカのペリーが、軍艦を率いて浦賀(神奈川県横須賀市)に来航。幕府は全国の大名へ意見を求めると共に国内の警備を命じた。国の一大事に際し、長州藩自体も、藩全体が団結する必要性に迫られる。

そして、安政3年(1856)9月、長州藩主・毛利敬親は岩国藩主・吉川経幹を萩に招き、親睦を深め、両家の距離は縮まった。さらに尊皇攘夷の機運が盛り上がるなか、文久3年(1863)2月、敬親は自ら岩国を訪れると、岩国を他の三支藩と同様に扱おうと伝える。かくして、岩国は長州藩の一員として本格的に活動することになった。

◆尊皇攘夷の断行

攘夷を実行する期限と定めていた文久3年(1863)5月10日、長州藩は下関において外国商船を砲撃(下関事件)。また、三条実美などの公卿を後盾に、攘夷を天皇が自ら率いることとするために、天皇の大和行幸(神武天皇陵参拝と攘夷親征の詔勅)を実現しようとした。

しかし、8月18日、会津藩や薩摩藩、中川宮などの政変により、大和

行幸は延期。三条実美など七卿の参内差し止め、長州藩の堺町御門の警備解任など、尊皇攘夷を強く進めていた人々は排除された(八月十八日の政変)。これにより経幹を含めた長州勢は京都を追われ、体制を立て直すために七卿とともに長州藩へ落ち延びた。

元治元年(1864)、長州藩は事態打開のため、福原越後など三家老と諸隊を上京させた。そして7月19日、蛤御門付近で京都守護職松平容保の会津藩や薩摩藩の兵と戦闘になる(禁門の変)。

結果、長州藩は敗退。吉田松陰の子弟で長州藩の尊皇攘夷を牽引していた久坂玄瑞(松陰の妹・文の夫)を失い、上京しようとしていた経幹や毛利元徳(敬親の養子で後の長州藩主)などは引き返すことになった。

さらに幕府は禁門への発砲を理由に長州藩を朝敵とみなし、朝廷は7月23日、長州征討の勅命を発令(第一次長州出兵)した。

朝敵とみなされては、長州藩の尊皇攘夷はもはや意味を成さなくなる。また、禁門の変で痛手を受け、下関事件以来、外国からの攻撃を受けている最中、幕府軍を中心とする大軍に今攻め込まれては、長州藩自体の存続が危うい。

そこで敬親は経幹へ、朝廷や幕府との交渉を依頼したのだった。

◆長州藩の危機を救う

経幹は広島藩と福岡藩、幕府征長軍総督の前尾張藩主・徳川慶勝、参謀の薩摩藩士・西郷隆盛との交渉を行った。その結果、幕府に従う恭順の意志を示し、禁門の変に参加した三家老の切腹を条件に、第一次長州出兵を戦うことなく終結させることに成功した。もし、経幹によるこの働きがなければ、長州藩は倒され、後の明治維新も叶わなかつ

ただろう。なお、三家老のうち福原越後は岩国市川西の龍護寺(現在の清泰院)で切腹している。その後、元治元年(1864)12月15日、高杉晋作が功山寺で挙兵したことから長州藩で内乱がおき、幕府に恭順する保守派が一掃された(元治の内乱)。長州藩は、幕府に恭順する姿勢を見せながら軍事を強化する「武備恭順」に方針転換した。

慶応元年(1865)9月21日、長州藩が軍備を整えていることを理由に、幕府は再び長州征討を発令(第二次長州出兵)する。

しかし、大義名分がないとして出兵を拒否する藩が出るなど、幕府側の編成は順調ではない。その間、長州藩は防衛を整える一方、坂本龍馬などの働きにより、長年衝突していた薩摩藩と薩長盟約を締結した。

慶応2年(1866)6月7日、幕府軍艦による周防大島砲撃を皮切りに、各地で幕府征長軍と長州軍の戦闘が始まった。戦いは、大島口、芸州口、石州口、小倉口の4箇所の国境で戦闘が行われたため、山口県では四境戦争とも呼ばれる。岩国藩は芸州口で参戦。経幹は最初の総指揮を務め、長州藩の遊撃隊などと幕府軍を迎え撃ち、政波、大野においても激戦を繰り広げた。

これらの活躍を通じて、関ヶ原の戦いから実に270年を隔て、吉川家は悲願だった家格問題の真の解決を果たした。実は四境戦争が終結した翌年の慶応3年(1867)年3月20

日に経幹は病死していた。しかし、その死は明治2年(1869)まで公表されなかった。そこには、吉川家が城主格に認められたその名誉を、経幹その人へ与えたいとする、敬親の想いがあつたのかもしれない。

■第二次長州出兵
(四境戦争)関係図



おぜがわ

松陰、小瀬川での別れ

長州藩の東端にある岩国・小瀬川。ここは陸路で旅をする長州藩士にとって、故郷との別れの地であり、帰藩に安堵する地でもあった。



▲岩国市小瀬川

夢路にも
かへらぬ関を打ち越えて
今をかぎりと
渡る小瀬川

胸躍る旅路

吉田松陰は生涯で少なくとも四度、岩国を通過している。最初は嘉永4年（1851）春、22歳のとき、長州藩主・毛利敬親の江戸参勤に随行しての旅だった。高森（現・岩国市周東町）に宿泊し、翌日には山陽道を玖珂、柱野、関戸、そして小瀬川を渡った。夢にまで見た江戸遊学に、胸躍る旅路だった。

◆錦帯橋見物

嘉永6年（1853）、再び江戸遊学の許しを得ると2月、船で江戸を目指す途中、岩国に立ち寄った。「錦帯橋を見た。橋の近くに諫轅というものが置いてあった。その揭示文がとても素晴らしい」と、日録に記している。諫轅とは別名・訴訟箱（目安箱）。揭示文には、「藩政に対して不満があれば、身分を問わず訴えて欲しい」とあった。これに感心すると、身分を問わず子弟を受け入れ、自由闊達な意見を重んじた松陰らしい。

◆護送での帰藩

安政元年（1854）、三度目の岩国通過は物々しい護送となった。松陰は子弟の金子重之助と共に、ペリーの黒船による密航を企てたが、失敗。罪人となつての帰藩。10月の小瀬川を罪人の籠で渡る。重之助はすでに重い病に冒され、その日の泊地・高森では、地元医師の診察を受けている。重之助は萩へ着くと松陰の祈りも届かず、獄中で病死した。

◆安政の大獄

安政5年（1858）、幕府は朝廷の許可を得ずに日米修好通商条約へ調印。松陰はこれを批判して翌6年、江戸への護送が命じられた。四度目の岩国通過。小瀬川で、松陰は長州の地への決別の想いを歌に託した。「夢路にもかへらぬ関を打ち越えて今をかぎりと渡る小瀬川」。夢のなかでも戻れないという歌の如く、10月27日、松陰は29歳の若さで処刑された。

小瀬川にはこの歌の碑がひっそり佇み、松陰の想いを現在へ伝えている。

Q 関連スポット



① 吉田松陰宿泊の地
（よしだしょういんしゆくはくのち）
岩国市周東町高森

山陽道筋で萩藩と岩国藩の境であることから、高森には本陣が置かれた。松陰は本陣近くに宿泊したと伝えられている。（写真上は松陰と縁深い岩本家がかった所。写真下は江戸からの護送時に泊まった宿があった所）

●MAP:P15-周東町マップ



② 吉田松陰東遊記念碑
（よしだしょういんとゆうきんねんひ）
岩国市関戸

関戸は山陽道の本陣が置かれた宿場町。本陣跡近くには松陰が当地で詠んだ詩を刻んだ碑がある。「美哉山河是国宝何以守之親与賢」。中国の故事を引用し、毛利家と吉川家が手を結ぶことを願った詩。松陰22歳、初の東遊だった。

●MAP:P14-C-3



③ 吉田松陰歌碑
（よしだしょういんかひ）
岩国市小瀬

松陰は安政の大獄によって江戸に護送される際、防長惜別の地である小瀬の渡場で歌を詠んだ。渡場があった川原のすぐ近く、歌が刻まれた石碑は建っている。

●MAP:P14-B-4

松陰の兄、杉民治

みんじ

激情家で実践派の弟と、温和で慎重派の兄。この二人は大変仲が良かったという。弟の維新の志が成就した後、兄は民の暮らしに役立つ数々の仕事を成した。山代（岩国市北部）は、その知られざる偉業を語り継ぐ里。

杉民治（すぎみんじ）

吉田松陰の実兄。松陰を物心両面で支えた。明治維新时期には代官として各地で任に当たり、その優れた手腕から「民治」の名を藩主から受ける。山代では水路造成・田畑開拓により人々の暮らしに貢献。その後、松下村塾を再興した。享年84歳。

吉田松陰の2歳年上の兄・杉民治は、過激な言動に及んだ松陰とは違い、生涯を通じて穏健な人物だったと評される。松陰が獄中にあつたとき、松陰から父母への不孝を申し訳なく思う文を受けた民治は、初心を貫き親への孝は案ずるなど弟を励ました。そして、600を越える書物を弟に差し入れた。あの松陰の生き様は、この兄の存在なくしては成し得なかつただろう。

29歳で松陰が亡くなった後、民治は藩の役人として庶民の暮らしに貢献する業績を各地で残している。そのなかの一つに長州藩・山代（岩国市北部）での水路造成事業がある。

明治時代の初め、山代の区長として、民治は本郷（岩国市本郷町）で任に当たった。紙の産地として萩藩の財政を支えてきたこの地だが、重い税率に喘ぎ、水利にも恵まれず田畑は痩せ、庶民の暮らしは困窮していた。

民治は人々の嘆願を聞き入ると、地元戸長の三分一健作らと共に水路を造り、田畑を開拓生活・防火用水を確保し、人々の暮らしは特段に向上した。また、民治を訪ねて山代へ来た若い医者・松浦幸民（後に澄川姓）に、この地の医療を担う

Q 関連スポット

⑤ 杉民治が整備した水路

岩国市本郷町神田

本郷町の古い町並みにある水路は民治が整備したもの。今も清らかな山水が流れる。現在も田畑へ水を供給している。

●MAP:P14-A-2



④ 神田原開拓碑（こうだはらかいたくひ）

岩国市本郷町神田

区長・杉民治と戸長等による開拓事業を後世へ伝える明治前期建立の碑。他に岡ノ寮、大迫、八場の4ヶ所にある。

●MAP:P14-A-2



Q 関連人物

小田村 伊之助（文助、楫取素彦）

（おだむらいのすけ・ぶんすけ、かとりもとひこ）



所蔵/群馬県立歴史博物館

伊之助は吉田松陰の妹・寿と結婚。松陰亡き後は萩藩主・毛利敬親の側近として外交を担当。岩国藩へ訪問し、藩主・吉川経幹へ協力を求めるなど、萩藩と岩国藩を取り持つ重要な役割を果たした。

維新後、初代群馬県令となり、地場産業だった養蚕を近代的な産業に発展させている。妻・寿の病死後、その妹・文と再婚。大正元年（1912）に84歳で逝去した。



所蔵/月性展示館

月性（清狂）

（げっしょう、せいきょう）

文化14年（1817）、遠崎（柳井市大島）の妙円寺（浄土真宗西本願寺派）に生まれ、九州、江戸に学び海防策、倒幕論を各地で唱えた。その思想は吉田松陰、久坂玄瑞、高杉晋作らに影響を与えた。松陰は友人・弟子への遺書に、「わが藩士、最も卓犖（めづきん）出て優れている」する者は清狂なり」と記し、その学びを広めるよう願った。

松陰没の前年・安政5年（1858）、42歳で逝去した。

4 長州を救った吉川経幹

きつかわ

つねまさ

◆長州に迫る危機

文政12年（1829）9月3日、第11代岩国藩主・吉川経章の子として生まれた経幹は、弘化元年（1844）、16歳で家督を相続した。その3年後の弘化4年（1847）には将来を見据え、文教の重要性から藩校養老館を建てている。

尊皇攘夷の機運が高まるなか、文久3年（1863）5月10日、長州藩は先陣を切って、下関に

て外国商船を砲撃。そして、元治元年（1864）には、禁門の変によって長州征討の勅命が下されると、幕府軍を中心とする征長軍による長州藩への攻撃が決定されようとしていた。

征長軍の規模はおよそ15万。これに対して、長州藩は外国との戦いなどで疲弊し、武備もまだ旧式で勝ち目はなかった。そこで、長州藩主・毛利敬親は、朝廷、幕府との交渉を岩国の経幹（当時35歳）に依頼した。

◆長州を守るため

経幹は極秘に岩国を訪れた西郷隆盛らと対面。長州藩三家老の切腹と敬親の謝罪状の提出などを条件に、長州への攻撃を延期することを請うた。

そのころ長州藩は、二つの派閥の間で揺れ動いていた。幕府に一意に恭順しようとする保守派と、幕府恭順の姿勢を見せながらも来る戦いに備えて武備を急ごうとする革新派である。この二派のせめぎ合いのなかで、経幹は征長延期の条件履行を何よりも急がせたのだった。

こうして、条件が履行されると経幹は、自ら征長総督府が置かれた敵地・広島へ赴き嘆願。ついに、征長軍は撤兵し、交戦の無いままに第一次長州出兵は終結に至った。

そのとき、ことが歌として残されている。

「神か仏か岩国様は扇子一つで槍の中」。



所蔵/毛利博物館

毛利 敬親

(もうり たかちか)

第13代長州藩主。若い才能を庇護し、有能な家臣を登用。困窮する長州藩を盛り立てた。下級武士の子で年下の吉田松陰から学んだという逸話がこれを裏付ける。家臣に「うん、そうせい」と返答することが多く、「そうせい候」とも呼ばれたが、重要な決断は自ら下したとされる。

◆明治の幕開け

経幹の働きによって、長州藩は焦土の危機から救われたのである。もし、第一次長州出兵において征長軍による総攻撃が決定されていたならば、その後の薩長盟約の締結もされず、大政奉還や王政復古も成しえず、明治という時代を迎えることは無かったであろう。

また、慶応3年（1867）の経幹の死（享年37歳）が明治2年（1869）まで公表されること、が無かったのは、幕末の激動の中、毛利宗家存続のために奔走した経幹の働きを受けて、吉川家の悲願であった城主格となる名誉を経幹へ与えたかったという敬親の思いがあったからかもしれない。

維新コラム／新たな時代

たった2年の偉大な学校

岩国英国語学所

◆藩主の英断

新たな時代の幕開け、明治4年（1871）、岩国藩は人材育成の重要性から、藩校養老館の精神を引き継ぐ藩立岩国学校を開設した。小学、中学に加え語学、女学、医学を備える先駆的な体制だった。しかし、問題が一つ。岩国には外国語の教師がいなかった。

そこで藩主・吉川経健は私費の家禄から経費を捻出し、現在の価値で200万円ともいわれる月給を払い、外国人教師を雇用した。その英断が、日本の電気の父と称される藤岡市助（東芝創業者）など、岩国はもとより、国の発展をかなえる多くの人材を生むことに繋がった。

◆キャリアは無くとも

岩国藩が雇用した教師は英国人のステイブンス。神戸の商社に働き、教師のキャリアのない24歳の若者。しかも14人兄弟の多くが大学に進学し、何人かは教師になったエリート家族にあって、彼は大学も出ていない。たとえ異国の地でも教師にならないかという誘いは、ステイブンスにとって



所蔵/岩国学校教育資料館

藤岡 市助博士

(ふじおかいちすけ)

安政4年(1857)生まれ、錦見(岩国市岩国)に育つ。日本のエジソンといわれ、東芝創業者の一人。

人生のチャンスだった。

授業は当然、英語で行なわれたが、驚くことにそれは語学だけに留まらない。物理、地理、天文、歴史に至る全てが、英語で教えられた。イマージョン・プログラムと言われる現代においても先進的な教育が行なわれた。

さらにステイブンスはフリーメーソン（英国を本部とする友愛団体）の会員だった。その理念は自由、平等、友愛、寛容、人道。授業で生徒たちはその精神に、新鮮な気持ちで触れたと思われる。ステイブンスが教鞭をとって1年半が過ぎたころ、廃藩置県による藩立学校の閉鎖が決まった。すると、県はステイブンスの契約が残っていることや、生徒が英書を読みこなすほどの成果が上がっていると政府に訴え、学校を続ける許可を特別に得るのだった。契約満了までの2年間を勤め上げて、ステイブンスは惜しまれながら岩国を去った。

◆生徒たちの活躍

吉田松陰がたった2年の授業で多くの偉人を育てたのと同じように、ステイブンスもまた、たった2年で優れた人材を育てた。

離任時17名の生徒のなかからは、藤岡市助をはじめ、帝国図書館（現・国立国会図書館）初代館長となった田中稲城、中央大学を興した法律学者・渡辺安積、日本の鉄道発展に貢献した大屋権平、そして英語教育に功績を残した複数の教師たちが現れた。

岩国を去って5年後、ステイブンスは31歳の若さで病死。教え子たちの眩い活躍を見ることはなかった。しかし、病床には若き藤岡市助が見舞いに訪れている。すでに日本初のアーク灯の点灯に成功していた市助の成長ぶりに、目を細めたことだろう。



⑨ 岩国学校教育資料館

(いわくにがっこうきょういくりょうかん)

岩国市岩国3-1-8

●MAP:P15-錦帯橋周辺マップC-3

岩国初代藩主・吉川広家から、6代・経永を除く12代・経幹までの当主及び一族の墓が、51基立ち並ぶ。塀により幾つかの墓域に区切られ、広家や経幹は「山のお塔」墓域に眠る。

●MAP:P15
錦帯橋周辺マップA-2



⑫ 吉川家墓所

(きつかわけぼしょ)

岩国市横山1-256-2

始めは仙鳥屋形と称し、元禄11年(1698)後の5代藩主・吉川広達幼時の居所として建てられ、以降は代々藩主幼時の居所に充てられた。12代・経幹、13代・経健も仙鳥館で生まれ、幼少時代を過ごした。

●MAP:P15
錦帯橋周辺マップA-2



⑪ 仙鳥館

(せんちょうかん)

岩国市横山3-3-11

弘化4年(1847)、吉川経幹により創建。文武を併置し、考試制度を導入。幕末岩国の志士を育てた。慶応2年(1866)の火事で大半を焼失した。(写真右側回り)

●MAP:P15
錦帯橋周辺マップA-2



⑩ 藩校養老館跡

(はんこうようろうかんあと)

岩国市横山3丁目回り

禁門の変の首謀者として三家老に切腹を命じ、第一次長州出兵は終結した。2家老は徳山で自刃。徳山藩主の家系だった福原越後は岩国の清泰院(当時龍護寺)で自刃した。境内には贈正四位福原越後君殉難碑がある。

●MAP:P15
錦帯橋周辺マップC-2



⑧ 清泰院

(せいいたいん)

岩国市川西1-7-3

岩国藩の海の玄関。第一次長州出兵の際、長州藩の処置について話し合うため西郷隆盛らがこの港から上陸した。また、第二次長州出兵の際には、幕府の調停使である永井主水や随行した新撰組・近藤勇らとの交渉の場となった。

●MAP:P14-C-4



⑦ 新港

(しんみなと)

岩国市新港町

元治元年(1864)春、吉川経幹は国境の魚切(岩国市美和町)を訪れ、飢饉の惨状を目撃。復興のため撫育役場を東林寺に設置。国固めのため坂上組を編成させた。撫育方になった玉乃世履は維新後、初代大審院長となり「今大岡」と称された。

●MAP:P14-B-2



⑥ 東林寺

(とうりんじ)

岩国市美和町波前510

Q 関連スポット

第三代奇兵隊総督

あかね たけと

赤禰武人

柱島(岩国市)に生まれ、月性、松陰に学び、その才は高く評価された。奇兵隊総督になったのも、その才と人望によるもの。しかし……晋作との対立、処刑、復権運動の顛末。その悲劇の真相とは？

◆柱島に生まれて

赤禰武人は天保9年(1838)、柱島(岩国市)にて、医者^{いしやく}の長男として生まれた。嘉永6年(1853)、遠崎(柳井市大島)の僧・月性の門下生となる。そして安政3年(1856)、月性の紹介を受け、松下村塾の門を叩いた。

その年のこと、武人は武士であつた赤禰家の養子になった。事を成すには、武士の身分でなければ叶わないと考えたからだ。しかし、松陰は国の大義の前では身分にこだわること自体、無意味であると。武人の考えを批判する文を月性に送る。

松陰は武人のことを、「才あれども氣少し乏し」と評したことがある。才能を評価しながらも、行動を起こす氣力が少し足りない。しかし、松陰はなお武人の才能に期待し、獄中から尊皇攘夷運動への手助けを頼んだとされる。

◆奇兵隊総督

松陰の処刑から8年後の文久3年(1863)、高杉晋作が奇兵隊を結成するとこれに入隊。そして、第三代総督となる。その翌年8月には四国艦隊(米・仏・英・蘭)が下関を襲撃。武人は奇兵隊を率いて奮戦した。しかし、やがて武人と晋作には考え方の違いが生じるようになる。

第一次長州出兵以降、幕府への恭順を進める保守派が藩政府の実権を握っていた。保守派は革新派を投獄し、奇兵隊などの解隊を進める。武人は交渉によって困難を打開しようと奔走した。しかし、晋作は武力による撃破を主張。「赤禰は一農夫、自分は譜代の家臣である」と、晋作は奇兵隊員を説得した。身分の無意味を説いた松陰が聞いたら、なんと言っただろうか。

◆裏切りを疑われ

12月15日、ついに晋作は挙兵し、成功。藩政府は武備恭順へ方針を転換した。そして保守派と交渉を進めていた武人はスパイを疑われた。それでも藩のため、長府藩士と共に薩摩藩との盟約交渉に奔走する武人だった。慶応元年(1865)3月27日、武人は西郷隆盛を訪ね大坂へ赴き幕府に捕らわれた。そこで長州藩と幕府との仲立ちを武人は申し出て釈放された。第二次長州出兵を阻むためだった。

しかし、帰国した武人を守っていたのは、裏切り者の烙印。武人は同志に幕府との戦争回避を必死に唱えるが、もはや誰も聞く耳を持つてはいなかった。

武人は柱島で捕らえられ、慶応2年(1866)1月25日、山口で処刑された。享年29歳。一



赤禰 武人(あかね たけと) 所蔵/おすみグループ
天保9年(1838)、柱島(岩国市)の医者^{いしやく}の長男として生誕。僧・月性、吉田松陰、梅田雲濱に学ぶ。久坂玄随、高杉晋作らと御橋組を結成、英国公使館焼討に参加する。奇兵隊総督になるも、高杉晋作と対立。裏切りを疑われ、慶応2年(1866)処刑。享年29歳。

◆復権の願い

言も弁明は許されなかったが、その獄衣に無念の叫びが記されていた。「真は誠に偽りに似、偽りは以つて真に似たり」。

明治に入り、武人の義弟は政府に贈位・復権を請願。柳井、岩国がこれに続いたが、実現しなかった。反対したのは奇兵隊の同僚・山縣有朋。下関戦争で、「武人は敵前逃亡した」と証言した。最後まで前線で奮戦との史料が残るなか、その証言の真意は謎のままだ。松陰に影響を与えた宇都宮黙^{もく}霖は武人の死に詩を寄せた。「天地の神がその冤罪を知っている」。晋作は自身の死直前、武人を死なせたことへの後悔を吐露したと伝えられる。贈位は成らなかつたが、同志の心のなか、幾ばくかの復権は成つたのかもしれない。

Q 関連スポット

ひがし たくしゃ

岩国の志士、東沢瀉

陽明学を学び、尊皇攘夷の情熱に突き動かされて行動し、獄に繋がれた。その獄中にあっても、子弟に教育を施した。まるで吉田松陰のような人物が、幕末の岩国にもいたことを知る人は少ない。その名は東沢瀉。「西の松陰、東の沢瀉」と言われる由縁である。



東 沢瀉(ひがし たくしゃ) 所蔵/岩国微古館

Q 関連スポット

岩国三土(栗栖天山・南部五竹・東沢瀉)の活躍を伝える碑。天山は沢瀉と必死組(後に精義隊)を組織し、藩風改革運動の先駆をなしたが柱島に流罪となる。慶応2年(1866)、天山は沢瀉を救うため島を脱し同志に所思を訴えるが賛同を得られず自刃した。また、五竹は慶応3年(1867)、沢瀉を救出し奇兵隊に呼応して尊攘の志を達しようとしたが未然に捕えられ刑死した。

●MAP:P15-錦帯橋周辺マップA-2



⑩ 三士誠忠の碑
(さんしせいちゅうのひ) 岩国市横山2-8



⑪ 沢瀉塾の跡地
(たくしゃじゅくのあとち) 岩国市保津町2-5

●MAP:P14-D-4

岩国市通津を流れる通津川と流域の田園を見渡す山すそに、沢瀉の邸宅の跡地があります。石碑のほか沢瀉と敬治を含む東家の墓等があります。



⑫ 東沢瀉終焉の地
(ひがしたくしゃしゅうえんのち) 岩国市通津1793

●MAP:P14-D-3

南部五竹が斬首された場所。五竹は東沢瀉、栗栖天山と並び三士と称される。沢瀉、天山が柱島に流罪になった時、沢瀉の救出と奇兵隊への呼応を語るが未然に捕えられ、斬首された。

●MAP:P15 錦帯橋周辺マップB-4



⑮ 妙覚院
(みょうかくいん) 岩国市岩国4-8-14

長州藩軍は第二次征長軍からの攻撃に備え、遊撃隊を主力として小瀬村に駐屯させた。その本陣がおかれた場所。芸州口の戦いでは、彦根藩を中心とする征長軍に対し大勝した。境内には戦死した遊撃隊士の墓がある。

●MAP:P14-B-4



⑯ 籌勝院
(ちゅうしょういん) 岩国市小瀬264

山代神威隊の屯所が置かれた場所。高杉晋作の決起によって藩政が武備恭順に変わり、藩内で諸隊が結成された。山代では神官による諸隊を結成。その一つ神威隊は芸州口の戦いで幕軍を退ける活躍をした。

●MAP:P14-A-1



⑰ 国穂寺
(こくおんじ) 岩国市本郷町字塚420

慶応元年(1865)より、幕府軍による征長に備え東境の守りの要として遊撃隊の本陣がおかれた。境内には、高杉晋作遊撃隊激励の詩の石碑などがある。また、庭は雪舟作と伝えられる。

●MAP:P15-周東町マップ 岩国市周東町上久原1957



⑲ 通化寺
(つうけいじ)

赤禰武人は柱島(岩国市)の医者^{いしやく}の長男として生誕。師の梅田雲濱が安政の大獄で投獄されたとき、その救出策を吉田松陰から授かるが、実行に至らず。松陰は武人の才能を大いに認めながらも、実行力に少々欠けると評した。

●MAP:P15-柱島マップ



⑭ 赤禰武人生誕の地
(あかねたけとせいだんのち) 岩国市柱島

柱島の西栄寺に赤禰武人は眠る。武人は長府藩士と共に薩長盟約の交渉に当たっている。長府藩主・毛利元周は武人が処刑されることを知ると自ら早馬を飛ばし、弁明に向かったが、間に合わなかったと伝えられる。

●MAP:P15-柱島マップ



⑮ 赤禰武人墓所
(あかねたけとぼしょ) 岩国市柱島350

幕末コラム

碑に刻まれた少年史

四境戦争が休戦となってもなお国境、岩国の緊張は続いた。そして、少年たちに悲劇は起きた。

◆少年たちの訓練

第二次長州出兵（四境戦争）が休戦となった後の慶応2年（1866）11月18日、あと1年ほどで明治を迎えようとしていた頃の出来事。

休戦とはいえ、いつまた幕府軍たちが攻めてくるかも知れない。国境の地、岩国にはまだ、そんな緊張が張り詰めていた。

岩国藩士の子弟、14歳から8歳の三十数人（藩校素読寮生）は、火攻めの遊戯（訓練）をするため、岩国山の伊勢ヶ岡に登った。そこには敵を迎え撃つための藩の砦が築かれている。

丘に着くと、さっそく少年たちは火を着けるための茅を集めた。そして、最年少だった8歳の山県幸輔に刀を預けた。もちろん幸輔

も訓練に参加しなかっただろう。しかし、この訓練には幼すぎる。武士の魂である刀の番をすることも大切な役割だと論された。

◆煽られた炎

茅に火が着けられて、いよいよ訓練が始まった。そして、誰も想像しなかった展開に。突然吹いた風にあおられて、火が四方に燃え移ってしまったのだ。藩の砦に燃え移っては大変。少年たちは必死で消火しようとしたが、燃え盛る炎は少年たちをも飲み込んだ。幸いにも砦への類焼は避けることができた。しかし、その代償は

余りにも大きく、16名の少年の命が奪われた。そのなかに、8歳の幸輔も。その幼い身体で仲間の魂も同然の刀を大事に抱いたまま、



伏して焼死していた。生き残った年長者のうち4名は、自刃によって責任をとろうとしたが、大人たちの慰めと説得により、思いどまったという。

火災から50周年に当たる大正4年（1915）、素読寮の同窓生有志によってこの史実は石碑に刻まれ、幸輔らの気概ある行動は永遠になった。



②② 群児招魂碑（ぐんじしょうこんひ）
岩国市岩国5-2 ●MAP:P14-C-4

Q その他スポット

第二次長州出兵のときには、僧侶もまた隊を組んで戦っている。西照寺は山代の僧侶により編成された偕行団の屯所が置かれた場所。偕行団は歩兵部隊と大砲部隊からなり、芸州で幕府軍と戦闘し、撃退している。



②③ 西照寺（さいしょうじ）
岩国市本郷町本郷1630 ●MAP:P14-B-2

小瀬川をはさんで、安芸国（広島）との国境地帯となる小瀬には、防御のため、多くの砲台が築かれた。また、岩国へ入る山陽道の関門周辺には、防御のための大きな柵や隠れて射撃するための隠し道なども造られた。



②④ 小瀬砲台跡（おぜほうだいあと）
岩国市小瀬 ●MAP:P14-C-4

第二次長州出兵の際、藩主夫人や古文書類の避難場所となった。吉川経幹は征長軍を岩国城下で迎え撃つ覚悟であったと言われ、夫人や古文書類を南河内にある福城寺に避難させている。



②⑤ 福城寺（ふくじょうじ）
岩国市大山279 ●MAP:P14-C-2

第二次長州出兵の際、岩国の城下で戦闘になった時に備え、城山山頂には陣屋が築かれた。万一の場合、城を枕に決死の覚悟で抗戦し、萩藩の援軍を待つ作戦だったとされる。



②⑦ 城山（しろやま）
岩国市横山 ●MAP:P15 錦帯橋周辺マップA-1



②⑧ 昌明館（しょうめいかん）
岩国市横山2-7-3 ●MAP:P15 錦帯橋周辺マップA-2

陸軍元帥長谷川好道の父で、幕末には一隊を組織し維新の勲功者として顕彰された長谷川藤次郎の墓や、「岩国名物、錦帯橋と宇野金太郎」と称された剣豪の墓など、幕末の岩国を支えた志士が多く眠る寺。



②⑥ 普濟寺（ふさいじ）
岩国市錦見1-7-10 ●MAP:P15 錦帯橋周辺マップB-4

幕末コラム

あつひめ

篤姫も渡った錦帯橋

大河ドラマで人気を博した「篤姫」。実は彼女も、鹿児島から江戸への道中、錦帯橋見物を所望したらしい。

嘉永6年（1853）9月11日の「御用所日記」には、このときのやりとりが記録されている。



▲歌川広重「六十余州名所図会 周防岩国 錦帯橋」（所蔵/岩国徴古館）。有名な絵師・歌川広重の浮世絵にも描かれた錦帯橋。

Q 関連スポット



▲実際のやりとりが記録された「御用所日記」の一部（所蔵/岩国徴古館）

◆強行突破した姫

薩摩藩主・島津斉彬の御姫様（篤姫）が、將軍徳川家定に嫁ぐために江戸へ上る途中のこと。岩国の城下町へ回り道をして、ぜひ錦帯橋を見物したいと、使者をつかわしてきた。

岩国藩は「橋は破損している部分もあり、御通行はお断りします。船で通って見物することはできます」と回答した。

しかし、篤姫は再び使者を通じて、「近年、主人（島津斉彬）が通行した時には許可を出しているでしょう。先例にならって許可を出せないのですか」と尋ねた。

役人は藩に相談するため「時間をください」と使者に伝え、とりあえず船で見物してもらうことを篤姫に伝えた。しかし、それで諦める篤姫ではなかった。

結局、藩の役所には、「御姫様が橋に押しかけられ、色々お断りしたので、御通行されました」との報告が上がってきた。

許可が下りる前に渡ってしまったとは、篤姫の豪胆でまっすぐな性格が現れたエピソードである。

山陽道から外れた場所にもかかわらず、篤姫もわざわざ足を運んで強引に渡る。それほど、錦帯橋の美しさは当時の人々に評判だったことがうかがえる。

天璋院（篤姫）（てんしょういんあつひめ）

天保6年（1836）12月19日（2月5日）～明治16年（1883）11月20日。薩摩藩島津忠剛の長女として生まれる。嘉永6年（1853）、薩摩藩主島津斉彬の養女となる。安政3年（1856）、近衛忠熙の養女となり、同年11月、第13代將軍徳川家定に嫁ぐ。



③⑩ 岩国徴古館（いわくにちようこかん）
岩国市横山2-7-19 ●MAP:P15-錦帯橋周辺マップA-2
●料金／無料 ●開館時間／9時～17時
●定休日／月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日～1月3日
●問合せ／0827-41-0452

藩政時代の古文書や工芸品、錦帯橋関連資料など、貴重な歴史資料が保管・展示される市立の博物館。岩国の歴史に関する展示や研究会が開催される。建物は建築工学、音響学で優れた才能を発揮した佐藤武夫の設計により、太平洋戦争時に建設された。新古典主義建築の影響を受け、近代建築としての価値も高い。



②⑨ 吉川史料館（きっかわしりょうかん）
岩国市横山2-7-3 ●MAP:P15-錦帯橋周辺マップA-2
●料金／大人500円 高・大学生300円 小・中学生200円
●開館時間／9時～17時（入館は16時30分まで）
●定休日／水曜日（祝祭日の場合は翌日）
●問合せ／0827-41-1010

始祖より800年の歴史をもつ岩国藩主・吉川家に伝来する歴史資料、約7000点を収蔵。国宝の刀剣「狐ヶ崎」をはじめ、吉川元春の兜、吉川広家の「なまづ形兜」など、国指定重要文化財の工芸品を多数所持。史料館の庭園は、淡路の白砂利を敷きつめ、黒みかげ石の石舞台を配し、世阿弥の「風姿花伝」をイメージしている。

